

育児語方言の擬声語・擬態語について

——壱岐島方言を中心として——

友 定 賢 治

は じ め に

本稿は、育児語にみられる擬声・擬態語について、形態分析を中心に考察するものである。ここでいう育児語とは、魚のことをタイタイと言ったり、花のことをアップイと言ったりするような（ともに広島県地方）、「保育者が意図的あるいは非意図的に、幼児に対してのみ用いる語」のことである。名称については議論のあるところであるが、ここでは、幼児自身が話すことばである幼児語と区別して、ひとまず育児語と称する。⁽¹⁾

擬声・擬態語は、一般には、副詞として文中で機能するが、本稿で扱うのは、幼児との対話の際に文中で副詞として機能する擬声語・擬態語ではない。たとえば、ツルツルという、めん類を食べる時の音をあらわす擬声語が、めん類そのものを指示するようになり、「ツルツルがある。」とか「ツルツルを食べる。」とかのように、名詞として機能する。⁽²⁾ そのようなものを扱う。つまり、擬声擬態発想の育児語についての考察である。⁽³⁾

育児語の擬声語・擬態語については、その数が多いという指摘はあるものの、詳細な分析は未だ十分ではないと言える。⁽⁴⁾

(一)

本稿では、前半、壱岐島（長崎県壱岐郡）の育児語を中心⁽⁵⁾に分析していき、後半では、他地域との比較、成人語の擬声・擬態語との比較を加えて考察していく。

まず、壱岐島の育児語にみられる擬声・擬態語を一覧表で示してみる。擬声・擬態語をそれぞれ、人に関するものと、人以外に関するものとに分け、さら

に意味分野に分けた。なお、擬声語・擬態語の判別についてはあいまいさを残している。

表1 擬声語・擬態語一覧表

擬声語—90

A 人に関する擬声語—24

① 口から発する音に関するもの—20

ア 食べる時の音 (2)	ツルツル (めん類), チュルチュル (めん類)
イ 飲む時の音 (1)	ゴクゴク (飲む)
ウ 口を開く時の声 (1)	アーン (口を開ける)
エ 吐き出す時の声 (3)	プー (吐く), エープ (同), チュー (同)
オ 泣く時の声 (2)	メーメー (泣く), エーンエーン (同)
カ 咳の音 (2)	コンコン (風邪, せき), ハクシヨン (同)
キ 排便の時の声 (4)	シーシー (小便), シーシ (同), シー (同), ウン ウン (大便)
ク 伸びをする時の声 (1)	ウーン (伸びをする)
ケ あいさつの時の声 (1)	アッ (あいさつ)
コ つねる時の声 (1)	メッ (つねる)
サ しかる時の声 (1)	メッ (叱る)
シ 煙草を吸う時の音 (1)	パッパ (煙草)

② 口以外から発する音に関するもの—4

ア 鼻をかむ時の音 (1)	チュー (鼻汁, 鼻をかむ)
イ 腹をたたいた時の音 (1)	ポンポン (腹)
ウ 身体をたたいた時の音 (2)	パチン (たたく), トントン (同)

B 人以外のものに関する擬声語—66

① 動物に関するもの

ア 鳴く時の声 (26)	ポッポ (鳩), ピヨピヨ (ひよこ), チーチー (ひよ こ, つばめ, 鳥, ねずみ), チュンチュン (鳥, 雀, つばめ), チュッチュ (雀, つばめ), チーチ (つば め), コンコン (きつね), ワンワン (犬), ニャー ニャー (猫), ニャンニャン (猫), メーメー (山羊, 羊), ミーミー (山羊), メー (羊), モー (牛), モーモー (牛), モーモン (牛), ヒンヒン (馬), ブーブー (豚), チューチュー (ねずみ), コケコッ コ (鶏), コッコ (鶏), シェーシェー (蟬), シェ ーシェ (蟬), ゲロゲロ (かえる), カーカー (鳥), カッカ (鳥)
イ 動く時の音 (1)	ブンブン (蚊)

② 水・雨・風・雷に関するもの
(10)

ジャブジャブ (洗濯, 石けん, ぬれる), チャブチャブ (水遊び, 風呂), ブチャ (風呂), バチャバチャ (風呂), バタバタ (風呂), バーバ (雨・傘), バーバー (雨), ゴロゴロ (雷), ブーブー (風), ピューピュー (風)

③ 鳴物のたてる音
(5)

トントン (太鼓), チントントン (太鼓), ピーピー (笛), リンリン (鈴, 風鈴), ガラガラ (鈴)

④ 乗物のたてる音
(6)

ブーブー (自動車, バス), ポッポ (汽車), トント
ン (船), プンブン (飛行機), チンチン (自動車,
三輪車), バタバタ (ヘリコプター)

⑤ 玩具のたてる音
(3)

カチカチ (積木), テンテン (まり), ガラガラ (が
らがら)

⑥ 履物のたてる音
(2)

カッコ (下駄, こっぱり), カッポリ (同)

⑦ その他のもののたてる音
(13)

ベッタンベッタン (餅つき), ベッタンベッタン (同),
グチュグチュ (煮る), パタバタ (てんかふん, うち
わ), バタバタ (うちわ), ボンボン (時計), カチ
カチ (同), カッチンカッチン (同), チョキチョキ
(はさみ), チョッキン (同), チョッキンチョッキ
ン (同), ゾリゾリ (剃髪), ジョリジョリ (同)

擬態語—27

A 人に関する擬態語—18

① 投げる姿に関するもの
(1)

ポイ (投げる)

② 物を捨てる姿に関するもの
(4)

ボンボン (ぬかるみ, 汚水, 砂, 大便, きたない),
ベッベ (廃棄物, ちり, ほこり, きたない, かびが生
える, 腐る, 汚れもの, 捨てる, 砂, 汚水), パイ (捨
てる), ベッペン (砂)

③ 転ぶ・倒れる・落ちる姿に関
するもの (2)

トン (落ちる, 倒れる, ころぶ), トーン (同)

④ 坐る姿に関するもの
(2)

チョイ (坐る, 正坐する), チョッチョイ (同)

⑤ 歩く姿に関するもの
(1)

チントントン (肩車)

⑥ かむ姿に関するもの
(1)

ニャンニャン (かむ)

⑦ くすぐる姿に関するもの
(1)

チョコチョコ (くすぐる)

⑧ 痛みに関するもの
(6)

チッカ (針), チカッ (針), チカチカ (針), チカン
(蜂), チカーン (のみ, 刺す, 蜂), チクチク (蜂)

B 人以外のものに関する擬態語—9

① 動物に関するもの
(1)

ピョンピョン (うさぎ)

② 火・煙に関するもの
(2)

モクモク (煙), ボンボン (火)

③ 雪の降る様子に関するもの
(1)

コンコン (雪)

④ 物が光る様子に関するもの
(2)

キラキラ (光るもの), ピカピカ (同)

⑤ 物がこわれる様子に関するも
の (1)

パーン (こわれる)

⑥ 物が転がる様子に関するもの
(1)

ゴロゴロ (石)

⑦ 水に関するもの
(1)

ベシャベシャ (ぬかるみ)

まず、数の整理をしてみると、次に掲げる表2～表4のようになる。

表 2

生活環境語彙		擬声擬態語
天地の部	26項目	9項目
動物の部	35	24
植物の部	4	0
衣食住語彙		
食の部	50	15
衣の部	31	6
住の部	26	11
人間語彙		
身体の部	36	9
人倫の部	7	0
生活一般語彙		
あいさつの部	61	38
	9	9
計	285	121 (42.4%)

表 3

育児語延語数	擬声擬態語延語数	%
574	192	33.4

表 4

擬声語	90語 (76.9%)
A 人に関する擬声語	24語 (20.5%)
B 人以外のものに関する擬声語	66語 (56.4%)
擬態語	27語 (23.1%)
A 人に関する擬態語	18語 (15.3%)
B 人以外のものに関する擬態語	9語 (7.6%)

表2のように、老岐島で調査した育児語彙の項目数は 285項目——この項目数は一地点の育児語彙総体にはほぼ相当する数であろうと考えている——であり、この中の 121項目には擬声・擬態語がみられ、約半数の項目にはみられることになる。また、延語数では表3のように33.4%にあたる。擬声語と擬態

語に分けると、表4のように、擬声語が77%を占めていて、その片寄りが注目されるが、幼児向けのことばであることを考えれば納得される。

では、育児語に、このように擬声擬態語が多いことの意味はどう考えたらよいのであろうか。幼児の言語能力を見はからいながらことば育てをするという育児語の本質に即して考えられねばならない。早川勝広氏は次のように述べておられる。言語獲得の具体的な前提条件と育児語の特質とは、次に示すように⁽⁶⁾対応している。

＜言語獲得の前提条件＞

＜育児語の特質＞

- ① 能記面の形成—————反復形
- ② 所記面の形成—————汎 用
- ③ シンボル機能の形成 ———擬声擬態語

聴覚映像と概念、能記と所記との関係が成立してことばの開始になるが、その記号関係の成立にとって重要なのは、信号から記号への移行、つまり自然的なものから恣意的なものへの移行である。その移行の契機となるのが、両者にまたがる性質を有する擬声擬態語であると考えられるというのである。

次に、いくつかの観点から分析していきたいが、まず、語頭音に注目してみる。表5のようである。A①、A②というのは、表1の一覧表で示した意味分野である。

多数順にあげてみると、

擬声語 tʃ, b, p, k, m, g, ʃ, t,

擬態語 tʃ, p

のようになっている。[tʃ], [p] が双方ともに多い。これを構音方法・構音位置によって整理すると、表6・7のようになる。

構音方法では、破裂音が圧倒的に多く、ついでは破擦音であるが、破擦音の大半は[tʃ]で、それ以外はほとんどない。摩擦音・弾音は合計しても10%に満たない。構音位置では両唇音と口蓋音が多く、歯茎音・声門音はわずかである。この音声の片寄りとは、幼児の子音習得順序——それは、概略、/マ//パ//バ/ などから破裂音へ、そして摩擦音・弾音へというものである——「チ」音化など幼児音の特質に合致しており、幼児の発音能力への配慮をみてとることができよう。しかし、全面的に幼児の発音能力に合わせたものとは言えな

表5 語頭音<擬声語>

<擬態語>

	A①	A②	B①	B②	B③	B④	B⑤	B⑥	B⑦	合計		A	B	合計
p	2	2	2		1	2			2	11		5	2	7
b			2	6		2			3	13			2	2
pj				1						1			1	1
k	1		5				1	2	2	11			1	1
g	1		1	1	1		1		1	6			1	1
t		1			1	1	1			4		2		2
tʃ	2	1	5	1	1	1			3	14		10		10
ts	1									1				
dʒ				1					1	2				
dz									1	1				
m	2		6							8			1	1
ʃ	3		2							5				
ç			1							1				
n			2							2		1		2
h	1									1				
ɸ				1						1				
r					1					1				
w			1							1				
a	2									2				
e	2									2				
u	2									2				

い。たとえば「チ」音を用いた「チカ・チク」（針などを意味する）などは、その鋭い音の印象を利用して幼児に警告しようとする意図をもっている。また、めん類を意味するツルツルや、小便などを意味するシッコ、シーシーなどは、幼児自身の発音ではチュルチュル、チッコ、チーチーとなるであろう。しかし、質問調査の際にはツルツル、シッコ、シーシーのように、幼児には発音の困難な音を含んだ語形で回答されるのが普通である。表5の語頭音でも〔ʃ〕

表6 語頭音構音方法

	擬 声 語	擬 態 語	合 計
破 裂 音	46 (51.1%)	14 (53.8%)	60 (51.2%)
破 擦 音	18 (20 %)	10 (38.4%)	28 (23.9%)
摩 擦 音	8 (8.8%)	0	8 (6.8%)
鼻 音	10 (11.1%)	2 (7.6%)	12 (10.2%)
弾 音	1 (1.1%)	0	1 (0.8%)
母 音	6 (6.6%)	0	6 (5.1%)

表7 語頭音構音位置

	擬 声 語	擬 態 語
両 唇 音	34	11
歯 茎 音	7	2
歯 茎 口 蓋 音	24	12
軟 口 蓋 音	17	2
声 門 音	1	

音があった。

このように、幼児自身の発音と育児語とでは子音の出現のしかたが異なることは次の比較でも分かる。育児語と2歳児30分間の発話資料⁽⁸⁾との子音出現頻度とを比べてみると次表のようになる。

表8 幼児語・育児語・子音出現頻度 (%)

幼 児 語																		
m	p	k	b	t	tʃ	j	h	ʃ	w	n	ɲ	ʒ	g	r	d	s	ts	
18.0	12.8	11.0	10.6	8.9	8.7	6.3	5.9	4.6	3.9	2.8	1.3	1.3	1.1	1.1	0.7	0.4	0.4	
育 児 語																		
tʃ	k	p	b	t	r	m	g	ʃ	ɲ	dʒ	pj	j	ts	w	ç	dz	h	
17.7	17.3	11.7	11.7	9.2	8.1	5.6	4.9	4.2	2.1	1.4	1.4	1.0	0.7	0.7	0.7	0.7	0.3	

〔k〕〔p〕〔b〕〔tʃ〕〔m〕〔t〕などが多く、〔ts〕が少ないことなど両者に共通する点が多いものの、育児語に〔r〕が多く幼児語に少ないことなど、幼児語と全面的に一致するものではないことを示していよう。

ただ、もう一つ注意しておかねばならないのは、質問調査の際にはツルツルと回答されても、実際に幼児に向かってはチュルチュルと幼児の発音どおりに発音されることも多いことである。

次に、語末音節に注目してみると次表のようになる。

表9 語 末 音 節

	擬 声 語	擬 態 語	合 計
/Ca/	11 (12.2) %	5 (18.5) %	16 (13.6) %
/Ci/	8 (3.8)	4 (14.8)	12 (10.2)
/Cu/	8 (3.8)	2 (7.4)	10 (8.5)
/Ce/	1 (1.1)	1 (3.7)	2 (1.7)
/Co/	8 (8.8)	2 (7.4)	10 (8.5)
/R/	22 (24.4)	0	22 (18.8)
/N/	28 (31.1)	12 (44.4)	40 (34.1)
/Q/	3 (3.3)	1 (3.7)	4 (3.4)

／N／で終わるものが多く、ついで／R／であるが、擬態語に／R／のないことに注目される。また、／Ce／で終わる語が、他の4母音がほぼ似たような数字であるなかで極端に少ないことに興味をそそられるが、その理由は分らない。また／Q／で終わるものは、自然傍受の調査ではもう少し多くなると思われる（当然質問調査の未熟さのせいであるが）。たとえば、ペッペ（捨てる）など促音を含む語形は、実際にはペッペッとなる場合も多からう。

次に、一語の語形に注目してみると、何といても反復形の多いことに着目される。擬声擬態語以外のものも含めた育児語全体の語形の特徴であり、この事も既に指摘されている。反復形には、ワンワン・ブーブーのような完全反復形と、ペッペ・シーシのような不完全反復形とがあるが、この両者を合計すると、育児語全体の66%程度になるという報告がある。そして、反復は、ほぼ例外なく2回である。成人語の擬声擬態語では、2回反復も多いが、4回反復というの(9)がかなりある。しかし、育児語では4回反復というの(10)はほとんど見られない。

ここでは完全反復形だけに注目してみる。擬声擬態語全体の中で完全反復形の量は次表のようになる。参考に非反復形の量も示した。

表10 完 全 反 復 形

	擬 声 語	擬 態 語	合 計
単位形 2音節	54 (60 %)	13 (48.1%)	67 (57.2%)
3音節	1 (0.8%)		1 (0.8%)
4音節	4 (3.4%)		4 (3.4%)

<非 反 復 形>

擬 声 語	擬 態 語	合 計
16 (17.7%)	10 (37.0%)	26 (22.2%)

単位形というのは、ワンワン・ブーブーの「ワン」「ブー」の部分を使う。全体で60%程度になり、その大半は単位形が2音節のものである。擬声語の方が多くなっているが、これは、擬声語の方が名詞として機能することが多いためであろうか。単位形2回の反復で語形に安定性が加わるということであろう。⁽¹¹⁾一方、動詞として機能する場合は、「～スル」とサ変動詞化するのが大半で、「～スル」として安定した形になるため完全反復であることを要求しないということであると考えてよからうか。名詞として機能する語のうちの70%程度が完全反復形であり、動詞として機能するものの中では30%程度が完全反復形である。

反復形が多いのは、幼児の発音能力に即しているということもあろうが、鏡味明克氏は、「伝達の確認とリズムカルな語形で幼児の興味を喚起するためであろう」と述べられ、さらに「分布の上では非反復形が山間部などで残存古形を示すことが多い」といった興味深い指摘もなされている。また、早川勝広⁽¹²⁾氏は次のようなお考えを示されている。反復音声は、聴覚と発声とを結合し、⁽¹³⁾聴覚による発声を誘導を形成させる上で——つまり構音能力を発達させる上で——重要な働きがあり、さらに、反復形は、部分（音節）と全体（語）との分化はあるもののまだ末分化であるため語音構成能力を引き出す上でも重要な意味をもつ語形であるというのである。

さて、次に、単位形が2音節の完全反復形に限定して、その単位形の構造を
 みる。まず、構音方法によって第1音節と第2音節との組み合わせを整理
 してみると次表のようになる。

表11 2音節単位形組合せ 第二音節

第 一 音 節		破裂音		破擦音		摩擦音		弾音		鼻音		母音		半母音		R	N		Q
	破裂音	5	1	4	1			4	2					1		6	10	4	
	破擦音	3	3					4								2	2		
	摩擦音															2	1		
	弾音																1		
	鼻音		1													4	1	1	
	母音																1		
	半母音																1		

㊦ 擬声語

㊦ 擬態語

第1音節が破裂音・破擦音（ただし大半は[tʃ]）に集中し、第2音節は／N／
 ／R／に集中している。また、破裂音・破擦音以外のものが第1音節の場合、
 第2音節は／N／／R／に集中している。さらに、第2音節に促音がないこ
 と、弾音が多用されていることなどに注目されよう。

ここで第2音節に／N／／R／が多いことの意味を考えてみると、先述の、
 反復形が語音構成能力を引き出すということに関わってこよう。ブーブーのよ
 うに／R／を含むもの、トントンのように／N／を含むものは、ツルツルとい
 った異音反復形よりは音素の対立の簡単な、幼児にとっては習得の容易な語形
 であろう。逆にツルツルなどは難しい語形である。育児語としてはツルツルで
 あっても幼児語としてはチューチューであることにもそれは見てとれる。この
 ように幼児の習得が容易である／R／／N／を含むものが多用されているので
 ある。

次に、単位形の母音の組み合わせは次表のようになる。

〔e〕母音が第2音節にみられないのが注目される。全体的にみると、「広
 母音——広母音」，「広母音——狭母音」，「狭母音 u——狭母音 u」の組み

表12 2音節単位形母音組合せ 第二音節

第一音節

	a		i		u		e		o	
a	6		2		2					
i		3				1			1	
u					3					
e		1							1	
o			2		1	1			1	1

㊤ 擬声語

㊦ 擬態語

合わせが多いのがわかる。

(二)

これまでは壱岐島方言の育児語を対象として考察してきた。以下には、他地域のものとの比較，さらに成人語の擬声擬態語との比較を通して，共通性と地域性，成人語に比較しての育児語擬声擬態語の特質などを検討してみる。比較の対象にするのは次の資料である。

○育児語——広島市安佐町鈴張方言の育児語彙（早川勝広「育児語方言の調査報告——広島市安佐町鈴張について——」『広島文教女子大学研究紀要』 第9巻 S 50.6.25）

○成人語A——鳥取県西伯郡中山町八重方言の擬声語・擬態語（室山敏昭『方言副詞語彙の基礎的研究』）

○成人語B——福岡県築上郡築城町寒田方言の擬声語・擬態語（広田由貴子「福岡県築上郡築城町寒田方言のオノマトペ」『国文学攷』第94号 S 57.6.30）

広島市安佐町鈴張方言の報告は，我々の壱岐島調査の際準拠したものであり，項目数・調査法・語の取りあげ方などほぼ同様である。成人語資料は，本稿とほぼ同様の形態分析が行なわれているので取りあげたが，これら以外に，一地点の擬声擬態語の報告はあまりない。

壱岐島方言を対象としたと同様の分析をし，その結果を次に表で示す。その後で，語の量・語頭音・語末音節・語形・完全反復形の単位形の構造のそれぞれについて検討する。

表 13

擬声語	75.4%	54.8%	42 ^語	48 ^語	125 ^語
A 人に関する擬声語	28.3%	14.8%	13	11	43
B 人以外のものに関する擬声語	47.0%	40%	29	37	82
擬態語	24.6%	45.2%	9	18	126
A 人に関する擬態語	14.4%	28.0%	6	12	105
B 人以外のものに関する擬態語	10.1%	17.2%	3	6	21
	鈴張方言	成人語A	共有語	老岐特有語	鈴張特有語

表 14

	育 児 語 数	擬声擬態語 延 語 数	%
鈴 張 方 言	972	350	36.0

表15 語 頭 音 多 数 順

<鈴張方言>

<成人語B>

擬声語	k p b tʃ m g d		g k b p d dʒ ʃ w
擬態語	p b tʃ k g t		g b p tʃ k d ʃ

表16 語頭音構音方法

	擬 声 語			擬 態 語		
	鈴 張	成人語A	成人語B	鈴 張	成人語A	成人語B
破 裂 音	61.5%		72.4%	67.7%	67.6%	53.8%
破 擦 音	17.0		4.6	27.1	5.7	9.5
摩 擦 音	1.8		15.8	0	22.4	24.6
鼻 音	9.4		0	0	4.3	7.2
弾 音	2.5		0	0	0	0
母 音	8.2		1.3	5.0		2.6

表17 語頭音構音位置

	擬 聲 語	擬 態 語
兩 唇 音	59	23
齒 莖 音	17	7
齒 莖 口 蓋 音	28	13
軟 口 蓋 音	38	13
聲 門 音	3	0

表18 子音出現頻度

k	tʃ	p	b	r	m	t	dʒ	ts	ʃ
18.2	13.9	13.2	10.8	9.6	5.3	4.8	4.6	3.9	2.8
d	h	n	g	j	w	bj	pj	s	∅
2.3	1.7	1.4	0.5	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.1

表19 語 末 音 節

	擬 聲 語	擬 態 語	合 計	
	鈴 張	鈴 張	鈴 張	成人語 A
/Ca/	8.4%	23.7%	12.2%	17.9%
/Ci/	7.9	23.7	11.8	16.3
/Cu/	6.2	8.4	6.7	11.7
/Ce/	0.5	0	0.4	1.6
/Co/	12.9	11.8	12.7	18.5
/R/	22.0	11.8	19.4	0
/N/	39.5	20.3	34.7	32.6
/Q/	2.2	0	1.6	1.4

表20 完 全 反 復 形

	擬 聲 語	擬 態 語	合 計
單位形 2 音節	49.4%	44.8%	48.3%
3 音節	8.9	6.8	8.4
4 音節	2.2		1.6
5 音節	1.1		0.8

非 反 復 形

擬 声 語	擬 態 語	合 計
27.5%	41.3%	30.9%

表21 2音節単位形構成法

	破裂音		破擦音		摩擦音		弾音		鼻音		母音		半母音		R		N		Q	
破 裂 音	3	1	10	8		2	8	4			1	2	1		15	2	16	2		
破 擦 音	3	2					1	1			1				8	2	4			
摩 擦 音											1				1				1	
弾 音																	2			
鼻 音															4		3			
母 音										1					1		2			
半 母 音																	1			

㊤ 擬声語

㊦ 擬態語

＜成人語A 単位形子音組み合わせ特質＞（室山敏昭氏のまとめ）

- ① 「摩擦音——摩擦音」の子音連続からなる語形は全くみとめられない。
- ② 「破裂音——流音」からなる語形がもっとも多く、ついで、「破裂音——破裂音」「破裂音——N」「摩擦音——流音」「破裂音——Q」の順に、多くの語形が認められる。

以下いくつかあげられているが省略する。

表22 2音節単位形母音組合せ 第二音節

第一音節	a		i		u		e		o	
	a	6		4	4	1				
	i	1	5						1	1
	u					4	5			
	e		1	1					2	1
	o	2	1	4	1	1			2	2

㊤ 擬声語

㊦ 擬態語

＜成人語B 単位形母音組み合わせ特質＞（広田由貴子氏のまとめ）

- 擬音語・擬態語ともに，広母音——半広母音の組合せが極端に少ないことが注目される。
- 擬音語も擬態語も，狭母音——狭母音，半広母音——半広母音，広母音——広母音という口の開きが同じである組合せと，狭母音——広母音，広母音——狭母音という口の開きの差が大きい組合せのものが多く，その中間のものは少ないことがわかる。
- 奥舌母音——奥舌母音の組合せが多いことがわかる。ついで多いのは，擬音語では，中舌母音——中舌母音，擬態語では，奥舌母音——中舌母音の組合せである。

以上，壱岐島の場合と同様の分析をした。なお，表21・22の次にある成人語のそれぞれの特質は，室山氏・広田氏のまとめられているものである。これらの結果と壱岐島のものとを比較しながら検討していく。

○擬声語・擬態語の量

表13のように，鈴張のものと壱岐島のものとは，ほぼ同様の数字になっている。また，成人語では，擬声語（54.8%）と擬態語（45.2%）とがほぼ同量であるのが育児語と大きく異なる点である。擬声語に集中する（75%程度である）のが育児語における擬声擬態語の特質と考えられよう。また，擬声語には人以外に関するものが多く，擬態語には人に関するものが多いことは，成人語も含めていずれにも共通している。室山敏昭氏は，「人に関しては擬態の方向へ，人以外のものに関しては擬声の方向に語が栄えがちである」と既に指摘しておられる。⁽¹⁴⁾

延語数でも表14のように，鈴張の36%は壱岐の33.4%に近似した値である。

このように，育児語の中で占める擬声擬態語の割合は共通性の高いものであると考えられよう。

なお，表13の右半分に，壱岐島と鈴張とではどの程度の共通語形（全く同形態の語形）をもつかを示している。壱岐島方言の中の，擬声語で46%，擬態語で33%が共通語形である。擬声語の方の割合が高いが，自然の音を写すということを考えれば理解できる。

○語頭音

多数順に鈴張のものを示してある表15と壱岐島のものとを比較すると、順序に違いはあるものの、擬声語では同じ音があがってくる。擬態語では、鈴張に多い〔k〕〔g〕が壱岐島にみられないのが注目される。しかし、壱岐島で〔k〕〔g〕が育児語に用いられないというのではない。子音出現頻度のところでもたとおりである。語頭には用いられないということである。

成人語Bと比較すると、成人語Bで擬声語に〔m〕がみられないこと、逆に育児語には摩擦音の〔ʃ〕破擦音の〔dʒ〕が少ない点などが異なるところである。

構音方法も鈴張と壱岐島のものとは共通する面が大きい。破裂音が10%ほど鈴張に多いのは、語頭に〔k〕〔g〕の来ることが壱岐島に少ないためである。成人語と比較してみると、破裂音が多く、弾音が少ない点は共通するが、摩擦音が成人語に多く、破擦音は逆に育児語に多い点などが異なるところである。

構音位置も二方言ともにはほぼ同様の数値を示している。子音出現頻度も同様である。

つまり、語頭音においても、育児語の共通性は高く、成人語と比較すると異なる点がいくつか指摘できる。

○語末音節

これは成人語も含めて共通する面が多いが、／R／が成人語にみられないのに対し育児語では多いことが注目されよう。それは育児語擬声擬態語の特質と言えよう。

○語形

完全反復形の割合も二方言ともにはほぼ共通している。

○単位形の構造

子音・母音の組み合わせともに、二方言の共通性は高い。成人語と比較してみると、母音の組み合わせはほぼ共通であるが、子音の組み合わせでは異なる傾向が見える。成人語で最も多い「破裂音——流音」の組み合わせは、育児語で最多ではない。また、「摩擦音——流音」「破裂音——Q」の組み合わせなどは、育児語ではほとんど見られないものである。

さて、このように比較してみて、育児語の方には大きな相違は見出しにくく、いずれの分析でも二方言の数字は近似したものになっている。しかし、個々の語形レベルでは、先述のように、壱岐島方言の擬声語で46%、擬態語で33%が鈴張方言と共通する語形であった。特に高い数字とは言いにくかろう。そうすると、個々の語形では地域性が見られるものの、それに使用される音、語頭・語末の音、語形、量などは高い共通性を見せるということである。それは、擬声語が75%程度を占めるということも理由の一つであろうが、幼児の言語能力を見はからいながらことば育てをするという育児語が育児語として要求する語形態があるということであろう。それは地域性を超越したものであると考えられる。なお、このような地域性と共通性をみることも目的の一つとして、現在、全国400地点で収集した資料をもとに言語地図化し考察しつつある。いずれ発表したいと考えている。

最後に、以上の分析を通して育児語の擬声擬態語の特徴として帰納できたことをまとめておく。

- ① 主として名詞・動詞（「～スル」のサ変動詞）として文中で機能する。
- ② 育児語彙の約半分の項目にみられ、延語数では30%程度にあたり、その中の70%以上が擬声語である。
- ③ 語頭音は、破裂音・破擦音（大半は〔tʃ〕）・両唇音・口蓋音が圧倒的に多い。成人語に多くみられる摩擦音はごく少ない。
- ④ 語末音節に／N／が多いこと、／Ce／が少ないことなどは成人語と共通であるが、／R／が多いのが育児語に特徴的である。
- ⑤ 語形は反復形が多い。完全反復形の単位形（2音節）の組み合わせは、「破裂音⇄破擦音」，「破裂音・破擦音→弾音」，そして、／R／／N／を第2音節にもつものが多い。母音は「a・i・u」3音の組み合わせが多い。
- ⑥ 個々の語形レベルでは地域性があるものの、語形・使用音・語の量などでは共通性が高い。
- ⑦ 成人語の擬声擬態語とは異なる点も多い。

お わ り に

以上、育児語の擬声擬態語について考察してきた。育児語は、大きくは、(1)

成人語からの転成，(2)擬声擬態語の二つに発生的には分類できよう。成人語からの転成については，これまでも考察されてきたし，筆者も報告したことがある。しかし，擬声擬態語の方は未だ十分な考察はない。本稿も形態分析で終わっており，それなりの結果は帰納されたものの課題も多い。⑦奄岐島方言の成人語擬声擬態語との比較，⑧その土地の方言の音声的特徴と育児語の対応関係の詳細，⑨幼児は，たとえばブーブーを「自動車の音」ととらえるのか，「動くもの」ととらえるのか，幼児の側に立った把握，⑩全国的視野での検討，⑪育児語の発想法の中にどう位置づけるか，などいくつもある。これらの課題も含めて，育児語というものを考察してゆきたい。

注

- (1) 村田孝次「育児語の研究——幼児の言語習得の一条件として——」（『心理学研究』31—6 昭36.3）
- (2) 古くは，「童詞」「幼な言葉」とも呼ばれた。村田孝次氏によって「育児語」という名称が提唱されたが，「幼児語」という名称の方が適するという考えもある（大久保など）。小林好日は「家庭語」と呼んだ。
- (3) 泉邦寿氏はオノマトペにもこれ（筆者注 修辞学の提喩のこと）に似た用法によって，指示対象の声や音や様子ではなく，指示対象そのものを指し示すようになることがある。これが特に幼児語に多く見られることはよく知られている。と述べておられる。（「擬声語・擬態語の特質」『日本語講座 第四巻』大修館 1976.12）
- (4) 村田孝次氏の注(1)の文献などが見出せるのみである。
- (5) 拙稿「奄岐島方言の育児語」（『文教国文学』第8号 昭54.3）として報告した。
- (6) 早川勝広「育児語と言語獲得」（『言語生活』351号 昭56.3）
- (7) 鏡味明克「幼児方言の音声的特徴」（『音声学会会報』164号）
- (8) 早川勝広「育児語研究の諸問題（下）」（『文教国文学』第6号 昭52.3）の中に示されている資料を引用させていただいた。
- (9) 早川勝広「育児語研究の諸問題（上）」（『文教国文学』第3号 昭50.7）また，村田孝次氏の注(1)の論文では61.2%となっている。いずれも過半数を占める。
- (10) 室山敏昭「鳥取県西伯郡中山町八重方言の擬声語・擬態語」（同氏『方言副詞語彙の基礎的研究』たたら書房 1976.1）にも報告されている。
- (11) 室山氏の注(10)の中にも
「2回のくりかえし形態が，語形としての安定度がもっとも高いことが知られる」とある。
- (12) 注(7)に同じ。
- (13) 注(6)に同じ。
- (14) 注(10)に同じ。